

# カウンセラー行動の知覚次元

## —— ロジャーズとパールズの場合 ——

田 中 富 士 夫

(金沢大学 文学部)

カウンセリングは対人影響過程であるから、クライアントがカウンセラー行動をどのように知覚するかは、カウンセリングが効果をもたらす上で重要な役割を演じている。Strong (1968) は、クライアントがカウンセラーをエキスパートで魅力があり信頼できる (expert, attractive, trustworthy) とみることがカウンセリング効果をひき起すための重要な要因であると仮定した。これらの3次元を測る尺度 Counselor Rating Form (CRF) を作成した Barak and LaCrosse (1975) が、ロジャーズ、パールズ及びエリスの初回面接フィルム (Shostrom, 1966) を視聴した大学生の CRF を因子分析した結果は、ロジャーズとパールズでは仮定された3因子が認められたが、エリスの場合には2因子しか現われなかった。

本稿は、CRF を短縮した日本語試作版がロジャーズとパールズのカウンセリング行動において前記3次元を捉えうるか否かを確かめた資料を提示するものである。

### 方 法

#### 被験者

被験者は、石川県が主催した家庭教育相談員養成講座を受講した36名 (男6名、女30名) である。彼らの年齢は38歳から65歳までの範囲にまたがり、その中央値は53歳であった。職業は、若干名の会社員と教師を除き無職の主婦が大多数を占めるが、このなかには教職経験のある人がかなり含まれていた。被験者たちは、いずれもカウンセリングに関心をもっていたが、カウンセリングについての系統立った教育や正規の訓練を受けた経験はない。

#### CRF 試作版

Barak and LaCrosse の CRF (1975) は、前記の3次元を測る尺度それぞれ12項目の対極的形容詞対からなる7点評定尺度である。これを筆者が日本語になおし各尺度6項目ずつに短縮し、さらに2項目 (「深味がある—表面的」、「陽気な—陰気な」) を加え計20項目の形

容語対を作成した。評定用紙に配列した形容語対の順序は図1の左端に示した番号の通りで、このうち( )を付した対は図1とは左右逆に提示した。

#### 手 続

被験者は、前記の養成講座の初期に Shostrom (1966) の制作したフィルムの日本語吹き替え版「グロリアと3人のセラピスト」(1980) のビデオテープを視聴した。ただし、ロジャーズとパールズの面接場面だけを提示し、それぞれのセッション終了後に CRF 用紙を配布した上で、「ビデオで見たカウンセラーの面接ぶりから、あなたが受けた印象を次の各項目について、7段階に評定して下さい」との教示のもとに記入を求めた。テレビ視聴は集団で行ない、ロジャーズを先に次いでパールズを視る群 (22名) と、この逆の順に視る群 (14名) を設けた。

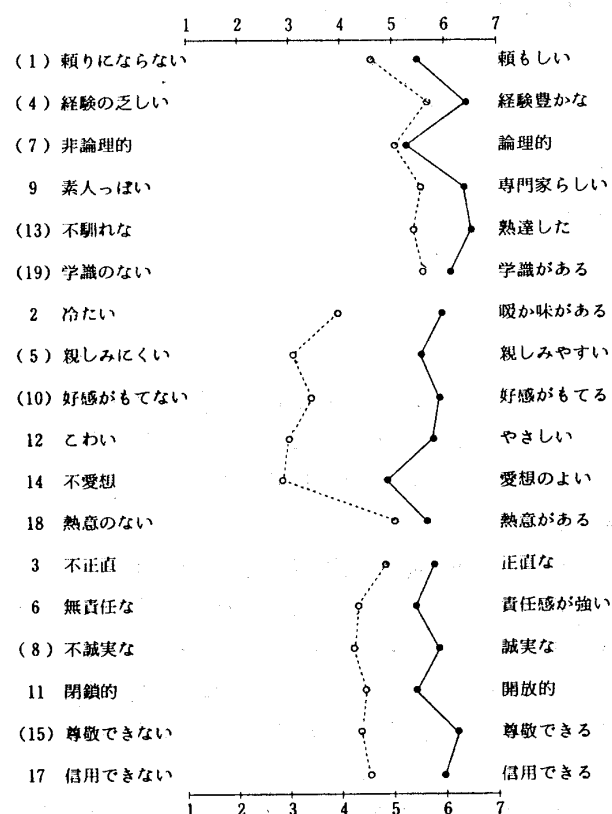
各形容語対は、左右の並べ方を図1のように改めた上でその評定段階それぞれに1点から7点までの値を割り振って集計した。なお、集計はすべて上記2群を合併した計36名について行なっている。

### 結 果 と 考 察

#### カウンセリング行動の比較

CRF の3尺度の各項目について、ロジャーズとパールズそれぞれの平均評定値をプロットしたプロフィールが図1である。この図では、上から expertness, attractiveness, trustworthiness (以下E尺度、A尺度、T尺度と略記する) の順に6項目ずつ並べている。なお、追加した2項目は図1では省いている。この図からわかるように、ロジャーズはどの項目においてもパールズを上回る高い評定値を示しており、とくにA尺度次元において両者の懸隔は著しい。表1に両者についての各項目の平均値と標準偏差、並びに両平均間の差の  $t$  値と検定結果の有意水準を示した。「経験豊かな—経験の乏しい」、「論理的—非論理的」、「学識のない—学識のある」及び「熱意のない—熱意のある」の4項目を除きすべて有意

図1. ロジャーズとパールズのカウンセリング行動に対する各形容語対の平均評定値 (●—● ロジャーズ; ○—○ パールズ)



差が認められ、いずれもロジャーズの方が高い評定を受けている。この結果は、E尺度ではパールズの方がロジャーズより高く評価されたと報告している LaCrosse and Barak (1976) の大学生の結果と異なっている。ただし、彼らは CRF 改訂版を用いて各尺度内の12項目の合計評定値の平均値を比較しているので本研究と全く同じ手続ではない。なお、A尺度とT尺度は、彼らの報告でもロジャーズの方がパールズより高い値をとっている。

表1にみられるように、標準偏差は18項目すべてにおいてパールズの方が大きいこともこの結果の顕著な特徴である。このことは、ロジャーズに比較してパールズのカウンセリング行動に対しては被験者による評価に個人差が著しいことを表わしている。パールズのカウンセリング行動に対してはロジャーズ以上にクライアントの知覚に変動性が大きいとすれば、ゲシュタルト療法の効果は来談者中心療法以上にクライアントによる差異が大きいことを意味するのかも知れない。

以上をまとめると、ロジャーズとパールズのカウンセリング行動を比較した結果は、E尺度、A尺度、T尺度いずれの次元においても前者が高く評価され、とくに「親しみやすい」、「好感がもてる」、「やさしい」とい

表1. ロジャーズとパールズの各項目の平均、標準偏差、t 値及び有意水準

	項目	ロジャーズ		パールズ		t-value	p
		平均	S D	平均	S D		
E尺度	1	5.50	1.44	4.56	2.05	2.63	<.025
	4	6.33	1.20	5.72	1.50	1.96	>.05
	7	5.19	1.56	5.08	1.95	0.28	>.05
	9	6.39	0.96	5.58	1.70	2.39	<.025
	13	6.47	0.81	5.39	1.64	3.82	<.001
	19	6.19	1.01	5.59	1.75	1.98	>.05
A尺度	2	5.94	1.19	3.92	1.99	5.25	<.001
	5	5.62	1.42	3.08	1.98	5.98	<.001
	10	5.92	1.16	3.39	1.78	6.54	<.001
	12	5.75	1.23	3.00	1.60	8.76	<.001
	14	4.89	1.14	2.83	1.34	6.63	<.001
	18	5.67	1.35	5.06	1.72	1.78	>.05
T尺度	3	5.75	1.11	4.78	1.55	4.16	<.001
	6	5.36	1.15	4.31	1.88	3.12	<.005
	8	5.83	1.18	4.25	1.84	4.45	<.001
	11	5.44	1.23	4.47	1.81	2.79	<.01
	15	6.19	1.19	4.31	1.98	5.52	<.001
	17	5.97	1.23	4.53	1.92	4.35	<.001
その他	16	6.00	1.01	5.25	1.56	3.12	<.005
	20	4.55	1.16	3.64	1.74	2.53	<.025

た attractiveness の次元での差異が著明であって、後者の方がすべての次元でその評価の変動性が大きいという特徴が示された。

#### 因子分析による検討

各カウンセラー毎に形容語対の評定値間の相関係数を求めて相関行列を作り、各行の最高値を対角要素にとって主因子解を用い、バリマックス回転により3直交因子を求めた。

表2は、ロジャーズの場合の各形容語対の因子負荷量である。第1因子は trustworthiness を表わす形容語対で負荷量が高い。第2因子で負荷量の高いのは expertness を表わす項目であるが、他の2つの次元に属する項目にも高いものがある。第3因子は attractiveness を表わすと考えられる。Barak and LaCrosse (1975) では、ロジャーズの第1因子は主として expertness, 第2因子は attractiveness と trustworthiness の一部、第3因子が trustworthiness の大半を表わしていた。本結果では、因子と形容語対次元との対応は彼らほど明確ではなく抽出された因子の順序も異なるが、少なくとも3次元の存在を仮定することは可能である。

表2. ロジャーズについての各項目の因子負荷量\*

項目	因子			h <sup>2</sup>
	1	2	3	
E 尺 度	1	49		29
	4			22
	7			24
	9	76		64
	13	74		65
	19	64		55
A 尺 度	2		67	70
	5	45		48
	10	52	51	68
	12		65	63
	14		67	50
	18	56		42
T 尺 度	3	77		60
	6	71		60
	8	64	48	70
	11	56		47
	15		50	35
	17			31
そ の 他	16	46		30
	20		74	60
寄与率	28.5	29.4	24.0	81.9

\* 小数点は略. 因子負荷量 .45以上を記載

表3は、パールズの場合の因子分析の結果である。第1因子は attractiveness と trustworthiness の大方の項目で負荷量が高い。第2因子は trustworthiness の次元で負荷量の高い項目が多いが、expertness の次元も含まれている。第3因子には負荷量としてみるべきものはない。この結果は、Barak and LaCrosse (1975) とは著しく異なっている。彼らの場合は、第1因子として expertness 次元すべてと trustworthiness 次元のかなりの部分、第2因子として attractiveness 次元の大半と trustworthiness の一部、第3因子として trustworthiness の大半と attractiveness 次元の若干の項目が挙げられている。したがって、彼らにあってはパールズの因子パターンもロジャーズのそれとほぼ同様で、カウンセラー行動を知覚する3次元仮説が支持されたと解されている。しかし、本結果ではパールズとロジャーズの因子パターンは異なっており、パールズではむしろ2次元の知覚と解した方が良さそうである。この限りでは、本研究のパールズは Barak and LaCrosse のエリスの場合に近いと思われる。

しかしながら、これ以上に因子分析の結果の一致・不

表3. パールズについての各項目の因子負荷量\*

項目	因子			h <sup>2</sup>
	1	2	3	
E 尺 度	1			69
	4	62		61
	7		56	46
	9			17
	13	77		82
	19	64		41
A 尺 度	2	78		68
	5	78		75
	10	79		83
	12	80		74
	14	79		70
	18		66	73
T 尺 度	3		69	67
	6	57		75
	8	59	62	81
	11	81		78
	15	60	68	82
	17	58	62	75
そ の 他	16		75	67
	20	64		60
寄与率	43.5	36.0	11.8	91.3

\* 小数点は略. 因子負荷量 .45以上を記載

一致を論ずるのは差し控えたい。というのは、本研究は因子分析の手続は同じであるが、用いたカウンセラー刺激は日本語吹き替え版であること、被験者の人数が少いだけでなく大学生よりも年齢的に相当高く彼我同質とはいえないこと、CRFの項目数も少く項目の等価性が必ずしも保証されていないこと等の差異があるからである。

したがって、ロジャーズについて知覚されたカウンセリング行動には、trustworthiness, expertness 及び attractiveness の3次元を見出すことができたが、パールズでは3次元仮説が支持できないことを指摘するにとどめたい。

今後検討すべき課題は多いが、まず Strong 仮説を検証していく上では、彼の3次元を表わすに適切な形容語対を洗練させること、とくにクライアントの語感にぴったりした言葉を選び出す必要があろう。本研究では、expertness を表わすのに適切な形容語に問題があったと感じている。

次に、カウンセラー行動の知覚に影響を及ぼしている刺激としてのカウンセラーの諸属性を吟味することが必要である。言い換えれば、カウンセラー行動の知覚に関

係があるのは、カウンセラーの依拠する理論に基づいた言語的応答の種類の違いなのか、表情・物腰・喋り方・声の調子等の非言語的要因なのか、あるいは容貌・服装等の違いによるのかを検討しなければならない。さもないと、仮りにロジャーズとパールズの「いわゆる」カウンセリング行動の知覚に違いが認められたとしても、その差異の源泉をつきとめることができず、この限りでは研究成果の普遍化は望めないであろう。

#### 引用文献

Barak, A. and LaCrosse, M.B. 1975 Multidimensional perception of counselor behavior. Jour-

nal of Counseling Psychology, 22, 471-476.  
LaCrosse, M.B. and Barak, A. 1976 Differential perception of counselor behavior. Journal of Counseling Psychology, 23, 170-172.  
Shostrom, E.L. 1966 Three approaches to Psychotherapy. Santa Ana, Calif. : Psychological Films. (Film). 日本・精神技術研究所 1980 「グロリアと3人のセラピスト」(ビデオテープ).  
Strong, S.R. 1968 Counseling : An interpersonal influence process. Journal of Counseling Psychology, 15, 215-224.

## Perceived Dimensions of Counselor Behavior

Fujio Tanaka

Kanazawa University

The purpose of this study was to present the data measured by the Japanese short version of Counselor Rating Form developed by Barak and LaCrosse. Video tapes of initial interviews by Rogers and Perls were watched by 36 subjects, who rated each counselor on 20 bipolar

adjectives. The means of ratings suggested that Rogers was perceived as more expert, attractive and trustworthy at all items than Perls. Factor analysis suggested the existence of three dimensions for Rogers, but only of two dimensions for Perls. Limitations of this study and implications for further research are discussed.